

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和4年度学校評価 結果

達成度（評価）	
A	十分達成できている
B	おおむね達成できている
C	やや不十分である
D	不十分である

1 前年度 評価結果の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・学校教育目標を念頭に、全職員が現状の課題をしっかりとらえて対応することができたために、校内評価及び学校関係者評価の最終評価において、A評価が9項目中7～8項目であった。 ・他者との交流は、特設の時間だけでなく授業の中にも生かされてきており、各単元の達成度は向上している。そして、今後の課題を、意見の交流を深めさせたり、自分で疑問をもち他者とともに考えていく力の育成に見いだすことができた。 ・自己肯定感、自己有用感をさらに高めるために、点数や賞などを大切にしながらもそのみが自己を評価する指標ではなく、日々の積み重ねや苦しいことを何とか解決していくことに大きな価値があることに気付かせていく必要が出てきた。 ・地域・家庭との強い結びつきは学校運営上とても大きな力となった。今後は児童の家庭での時間の過ごし方について協議を深めていく必要がある。
2 学校教育目標	<p>心豊かで 自他ともに大切に し 共に学び合う たくましい子どもの育成</p> <p>～正しく、かしこく、たくましく～</p>

3 本年度の重点目標	<p>○かしくい子ども</p> <p>よく見て、よく聴き、考えを持ち、伝え合う子</p>	<p>○自分も周りの人も大切に子ども</p> <p>よさを認め、思いやりと感謝の心をもつ子ども</p>	<p>○元気で落ちついた子ども</p> <p>基本的な生活習慣が整い、元気で落ち着きのある子ども</p>	<p>→ 三方向から ← 三方向へ</p>	<p>新たな活動に向かう 「心のバネ」</p> <p>※心のバネ…自己肯定感を土台に達成感や満足感のある活動を仕組み、それが次の新しい活動への興味・関心・指向性へとつながる心のはたらき</p>
-------------------	--	---	--	-----------------------------------	--

4 重点取組内容・成果指標

(1)共通評価項目				中間評価		5 最終評価				主な担当者
評価項目	重点取組		具体的取組	進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	最終評価		学校関係者評価		
	取組内容	成果指標 (数値目標)				達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言	
●学力の向上	●全職員による共通理解と共通実践	●「唐津の学びスタイル」チェックシートにおけるA評価が5項目以上となるようにする。	・教職員間で「唐津の学びスタイル」チェックシートを共有する。 ・全職員で校内研修を推進し、全学年が年1回の研究授業と研究協議を実施する。	A	・「唐津の学びスタイル」チェックシートの「4つの感」について、今後、共通理解を図る。 ・全職員による研究授業が「計画的」に実施できた。	A	・「唐津の学びスタイル」チェックシートで、8項目中5項目において具体的に取組むことができた。 ・全職員が研究授業・研究協議を実施できた。	A	・授業を大変細かく分析されているのだと知ることができた。	○学力向上対策コーディネーター(早瀬) ・研究主任(永田)
	○基礎基本の定着と主体的に学ぶ態度の育成	○「授業が分かりやすい」と感じる児童を90%以上に上げる。	・「考えを交流する時間」や「ふり回りタイム」を、毎日の授業の中に取り入れる。 ・個別最適・協働的な学びに生かすため、場面に応じてタブレット端末やICT機器を取り入れる。	A	・PWで自分の考えをしっかりと持たせることで、お互いに考えを交流する時間が充実した。ふり回りの視点を提示することで振り回りの記入をすることができた。 ・学年に応じたICTの活用に取り組んだ。全校一斉にリモート授業をし、各家庭と学校をつないだ意見交流ができた。	A	・自分の思いや考えをもち、友達と交流して考えを深める授業を進めてきた。児童の90%が「授業がよく分かって楽しい」と答えている。 ・学年の実態に応じてTeams等のICT機器を使った授業に取り組んだ。児童の96%が「タブレットを使った授業は分かりやすい」と答えている。 ・本の持ち帰りが減ったと感じる。	A	・意見をよく出すことができている。また、他人の意見を即否定しない。 ・タブレット端末の自宅での接続は、保護者が関わっていることで可能になっている。	○研究主任(永田) ・学力向上対策コーディネーター(早瀬)
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○道徳の授業の中に、議論する活動を仕組み、道徳に関するアンケートにおいて肯定的な回答をした児童の割合を90%以上に上げる。	・道徳の授業を年1回以上保護者に公開し、保護者の意見及び感想を職員で共有し、取組を通信等で発信する。 ・人権集会を年5回以上開き、職員が輪番で「人権」「共生」「協力」等の話をする。	A	・6月の唐津教育の日の学校公開で全学年ふれあい道徳を実施することができた。授業の様子は学級通信で各学年保護者に知らせ、学校だよりで地域の方々にも知らせることができた。 ・人権集会を5回開き、「人権」「共生」「差別」「労働」などのテーマで児童に考えさせることができた。	A	・6月の唐津教育の日の学校公開で全学年、ふれあい道徳を実施することができた。授業の様子は学級通信で各学年保護者に知らせ、学校だよりで地域の方々にも知らせることができた。 ・学校評価アンケート(児童用)で道徳の授業について肯定的な回答をした児童が96%であり、授業が児童の道徳的態度や考え方の育成に寄与していると考えられる。	A	・今後も、公共の物を大切にしたり、地域の人々に感謝する心をもっていてほしい。	○道徳教育推進教師(中島) ・各学年担任
	●いじめの早期発見、早期対応体制の充実	○いじめの予防、早期発見、適切対応、事後観察に努め、「学校が楽しい」と感じる児童が85%以上にする。	・各学年の発達段階に合わせた「いじめ」防止に関する授業を、1回以上行う。 ・学期に1回、教育相談週間に合わせて独自の「心のアンケート」をとり、担任や職員全体が関わって教育相談を行う。	B	・道徳や学級活動の時間に各学年の発達段階に合わせた「いじめ」に係る授業実践を行っている。 ・「心のアンケート」や普段の生活の中で早期発見、寄り添った対応、経過観察に努めている。 ・「人権集会」で共生、差別等のテーマで職員が話をして児童の人権意識を高めている。	A	・全学級で、道徳や学級活動の時間に、「いじめ」に係る授業実践を行った。 ・「心のアンケート」をもとに、「いじめ」の予防、早期発見に全職員で努め、「学校が楽しい」と答える児童が90%以上になった。また、全保護者が「我が子はいじめを受けていない」、「あてはまる」若しくは「ややあてはまる」と答えた。 ・「人権集会」で、自分事として考えながら話を聞くことができ、人権感覚が高まった。	A	・いじめは、後になっても残るものである。一人一人の対応力を育成していくことも大切である。 ・公民館の中では、トラブルが生じて子どもが解決できるように努めている。	○心ゆたか部(山下) ・教育相談(尾花)
	◎自らの夢や目標の実現に向けて努力する気持ちを高める教育活動の推進	◎日々の授業や行事等の取組を通して、自分の成長を感じる児童を85%以上に上げる。	・郷土を愛する心を育てるため、地域のゲストティーチャーを迎えての活動を取り入れる。 ・読書の広がりを持たせるために「kintoもあブックチャレンジ」に取り組んでいる。 ・「キャリアパスポート」を活用し、自分の成長の跡を振り返ることができるようにする。 ・各行事等に、出番・役割・責任・承認のある活動を取り入れる。	A	・地域人材をかき立て、稲づくり、炭づくり、しめ縄づくりなどに取り組んでいる。 ・読書の広がりを持たせるために「kintoもあブックチャレンジ」に取り組んでいる。	A	・日々の授業や行事等の取組を通して、93%の児童が自分の成長を感じることができた。 ・キャリアパスポートを教室に常備し、学期ごとにめあてを立てて、ふり返らせることで、自分の成長を感じることができた。 ・運動会や音読発表会などで、全員に出番があり、責任をもって取り組むことで、達成感を感じていた。	A	・児童は、地域行事によく参加している。 ・4年生くらいから、自分がやりたいと思っていることが大きく変わってきている。	○教務主任(早瀬) ・各学年担任
●健康・体づくり	●望ましい生活習慣の形成	○「大好き良い子カード」の生活チェックの点数が90点以上の児童を80%以上に上げる。	・「大好き良い子カード」の自己評価などを参考に、月ごとに成長や高得点維持について賞賛していく。 ・家庭と連携し、ノーテレビノーゲームデーを毎月1回設定し、結果を育友会と共有する。	B	・10月の大好き良い子カードの生活チェックの点数が90点以上の児童は45%であった。80%以上を目指して指導を継続していきたい。 ・ノーテレビノーゲームデーを毎月1回設定した。各家庭で実施されている。	B	・大好き良い子カードの生活チェックの点数が年間通して90点以上の児童は約50%であった。また、年間通して70点になっていない児童が13%いた。全体的な底上げが必要である。 ・ノーテレビノーゲームデーを毎月1回設定した。取り組みの効果が発揮されるように、取り組み状況を確認していく必要がある。	A	・ゲームは保護者が管理すべきである。ゲームの影響で、言葉遣いが悪くなってきている。 ・育友会と青少年協会の合同講演会では、SNSトラブルを避けるための保護者向け講演会を計画していくのがよいのではないかと。 ・体力づくりに取り組まれているので、項目にあげてもよいのではないかと。	○生徒指導主任(高橋) ・体育主任(高木)
	○(学校独自重点取組・任意)	○児童生徒の交通事故を0(ゼロ)にする。	・下校指導において、毎日全児童に交通安全に関する注意喚起を行う。 ・危険な事案や情報があれば、早急に公民館や育友会役員と情報共有をする。	B	・全児童が集団登下校をしている。適宜注意喚起をしたが、危険な行動が数回あった。今後も注意喚起を継続していきたい。下校時の見守りについて保護者・地域への協力を仰ぎ、飛び出し防止看板設置や公民館放送等の対応をいただいている。	B	・下校時の指導を中心にして、注意喚起を行ってきたが、危険な行動が数回あった。今後も注意喚起を継続していく必要がある。 ・交通事故「ゼロ」を目指して、公民館や育友会役員と情報交換をすることができた。下校時の見守り、飛び出し防止看板設置、公民館からの放送等の対応をいただいていた。	B	・集団登校の時に遅れて出たときに、先に行ってしまうことがあったので、高学年を中心に待つように心がけてほしい。 ・自転車の乗り方について、保護者・地域と連携した指導ができるのではないかと。 ・車の通行量は増えている。下校時の放送など、安全喚起について地域が協力をしていく。	○心ゆたか部(池田) ・登下校指導(高橋)
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を全職員が遵守する。	・予定退勤時刻を明確にし、仕事の軽重を付けて業務に取り組む。 ・金曜日の定時退勤日を徹底するために、朝と退勤10分前に呼びかける。 ・提出期限がある業務に関しては、早めに担当者に伝え、余裕をもって取り組めるようにする。	B	・4月と9月に、ワークバランスを考えた業務遂行を呼びかけることができ、毎日施設時刻を明記するようにしている。超過勤務月平均約30時間(年度当初)台が、10月時点で20時間台となってきているので、さらに業務の効率化を図る。 ・提出期限がある業務は、受付日から翌日までに担当者に渡せることができた。	A	・4月、9月に続き、12月もワークバランスを意識した業務について呼びかけた。日々の施設時刻は明記し、業務の効率化やなるべく残業をせずに帰る意識を持たせる働きかけを徹底したので、1月は超過勤務を20時間未満となった。 ・業務改革を意識した次年度計画づくりに着手できた。また、校区統合準備委員会の始動に合わせ、カテゴリ別の準備内容の検討に入ることができた。	A	・全国的な問題になっているが、勤務条件の改善は人材獲得にもかかわってくる。	○教頭(古賀) ・事務主事(山田)
(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目										
評価項目	重点取組		具体的取組	進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	最終評価		学校関係者評価		主な担当者
	取組内容	成果指標 (数値目標)				達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言	
○特別支援教育	○教員の専門性と意識の向上	○特別支援学級及び個別の支援が必要な児童の理解と対応について、成果指標を達成した教師90%以上に上げる。	・月一回の児童理解協議会において、特別支援学級在籍児童及び個別の支援が必要な児童の実態把握と具体的支援について共通理解を図る。 ・特別支援教育の研修を、主に発達障害の理解と対応について、年3回以上実施する。 ・コグトレに組み込み、児童の認知能力の理解と把握に努める。	B	・学期に1回の割合で児童理解協議会を行っており、その中で個別の支援が必要な児童の実態把握の報告と具体的な支援について共通理解を図ることができた。 ・特別支援教育の研修を今日までに2回取り組むことができた。 ・コグトレは2学期からスタートしており、児童の認知能力の把握に留まっている。	A	・児童理解協議会やケース会議を行い、話し合いの中で個別の支援が必要な児童について、共通認識を図り、対応に繋げることができた。 ・特別支援教育の研修を年3回行い、発達障害への理解と対応について職員間で話し合うことができた。 ・児童がコグトレをしている様子を見ながら、児童の認知能力の実態を知るとともに、授業に活かすように取り組むことができた。	A	・特別支援学級の児童が、最近成長してきた。 ・論理性と直感の育成は、両方とも大切である。	

●…県共通 ○…学校独自 ◎…志を高める教育

5 総合評価・次年度への展望	<ul style="list-style-type: none"> ・学校教育目標を念頭に、全職員が計画的・組織的に対応することができたために、校内評価及び学校関係者評価の最終評価において、A評価が9項目中7～8項目となった。 ・他者との交流が児童の間に浸透してきており、他者と考えに触れることは児童にとってスタンダードになってきた。今後は、お互いの考えをさらに考えを深めていくことができる授業づくりを追求していく。 ・自己肯定感、自己有用感を高めるために、全校でスピーチタイムや児童集会での個人発表、運動会や卒業式などでの個々の役割を明確にし承認してきたので、授業中や集会等で自信をもって行動する児童の姿が増えてきた。 ・地域・家庭との強い結びつきは、今年度も学校運営上とても大きな力となった。今後は、交通安全への意識向上を目指してさらなる連携を必要とする。
-----------------------	---